

1 よい学校とは、児童・生徒が教師を尊敬している学校です

定刻までにきちんと登校し、授業中は静かで、廊下を走り回ったり、大声で騒いだりすることもなく、教師の指導には素直に従い、一日中、皆一生懸命勉強する学校が望ましいのです。

尊敬される教師になるためには、教師はふだんの研究、努力を日々積み重ね、自らの資質、指導力の向上を図らねばなりません。家庭や地域では担えない教育、指導が専門にできる人故に教師なのです。教師が教師であるためにしてはいけない三つのことがあります。

- ① 児童・生徒にうそをつくこと。
- ② えこひいきをすること。
- ③ 教え子に手を出すこと。

2 よい学校とは、よい教師のいる学校です

教育の仕事は専門職とされています。（教育の地位に関する勧告：特別政府間会議1966）

教育の仕事は、厳しいふだんの研究を通じて獲得され、かつ維持される「専門的知識」と「技能」を必要とする高度な仕事です。

教師の仕事の第一義は授業です。教師は、質の高い授業ができるかどうかで勝負が決まります。教師が磨くべきことは次のことです。

- ① 授業方法、授業の善し悪しと教え方の手腕
- ② 感性
- ③ えこひいきをしない
- ④ コミュニケーション能力
- ⑤ 強靱な精神力



3 よい学校とは、教師の服装がきちんとしている学校です

教師は中身はもちろんのこと、服装もマナーも大事なことです。服装とマナーのきちんとしている教師はどここの学校にもいます。

学校の教師の服装は児童・生徒と行動しやすいようにラフなのがよいといわれます。しかし、一般社会では、会社員や団体の職員は独自のユニホームか、きちんとネクタイを結んだ服装で仕事をしています。学校の教師の服装は人前（児童・生徒）に出るのに、だらしない格好では指導が徹底しないのです。体育や野外活動の時以外は、男性はネクタイをし、女性は清楚なその場にふさわしい服装をし、一般社会の常識の範囲から逸脱してしまってはよくありません。

4 よい学校とは、学校規律がしっかりし児童・生徒の教育環境が守られている学校です。

授業中、授業を妨害する児童・生徒がいます。おしゃべり、立ち歩き、物投げ等。教師が注意すると逆上し、教師に暴力を加えることもあります。

授業を妨害する児童・生徒は別の教室で指導すればよいのですが、そうすると差別したといいますし、非行問題でも警察の力を借りると、教育の自殺だとか、学校教育の敗北だという人もいます。

教師と児童・生徒の信頼関係が大切で、児童・生徒をどこまで信じ、教師の愛情で教育すれば必ずよくなり、それが本当の教育の力だといわれます。

授業中、外に飛び出した児童・生徒を追いかけ、なだめすかして連れ戻してきた教師は、児童生徒思いで教育熱心だと評価する向きもあります。だが、その間大多数の児童・生徒の授業は中断したままです。荒れる学校・学級の児童・生徒の学力がつかないのは、日々、まともな授業が全くできないからです。

※ アメリカの学校・学校再建のためにゼロトレランス方式の生徒指導が功を奏した。
ゼロトレランス～寛容さなしの生徒規律指導

5 よい学校とは、授業中無駄話一つなく、真剣な授業が展開されている学校です。

私立中学校のある校長は、自信に満ちた表情で「うちの生徒は皆よく勉強し、授業中は無駄話一つなく、シーンとしています。」と話しました。首都圏では6年生の半数以上の児童が私立中学校を受験し、2割近くの児童が私立中学校に進学します。

私立の教育環境が公立よりよく守られています。経済的に豊かな家庭でなければ私立に進学させることはできません。公立学校の質の向上が差し迫った課題なのです。

6 よい学校とは、運動会・体育祭で児童・生徒が一生懸命競争する学校です。

運動会・体育祭は学校の大切な行事です。体育はいろいろな体操・運動により、体力の向上、健康の維持増進を図るための教育であり、知育・徳育と同じように教育の重要な一面を担っています。

競争に負けるわが子の姿を見るのが忍びない、一番後ろを走る子が可哀想だから、みんな並んでゴールさせるという教師、テープを切らないで待っている子。一生懸命競争させるべきです。当然順位はつきます。走るのが得意な子、勉強が得意な子、得意なものや不得意なものは誰でも持っています。人生を生き抜く力をどうつけるか、それが教育の肝心の視点です。



7 よい学校とは、学力テストの結果を分析し、児童・生徒の基礎学力を確実に身につけさせる学校です。

全国学力テスト（小6，中2）が2007年から実施されるようになりました。国語と算数・数学の基礎基本の知識と活用、生活習慣・学習環境に関する調査です。

授業中の様子を見れば児童・生徒の学力は把握できるなどといって、学力テストに反対する大学教授もいますが、授業光景を見ただけでは正確な学力は把握できません。

テスト結果に差が出るのは当然なことで、なぜ下位なのか、よく調査分析して原因を明確にし、指導方法や指導技術、カリキュラム等の改善を図り、いかに努力するかに係っています。

小・中学校での基礎基本の学力は最も大切な学力です。高校、大学、専門分野の研究へと進んでも、大きな土台となります。

8 よい学校とは、「悪いこと」をしてはいけないと厳しく教える学校です。

昔から日本には、「うそをつくともやぶこやぶに舌を抜かれるとか、誰も見ていないからといって悪いことをしてはいけない、お天道様（太陽）が見ている」というよい教えがあります。

子ども期に、善悪についての厳しい教えを受けずに育った人は、大人になっても不正乗車のようなことを平気でするのです。善悪、正しい判断、道徳等の教育は、戦後少し粗末に扱われているように思います。

9 よい学校とは、電車やバスの中で率先して席を譲る児童・生徒を育てる学校です。

家庭でよくしつけられた子どもは、電車の中でも席を率先して譲ります。家庭のしつけが満足にできない、今日的日本の事情（親もしつけられないまま親になる）なら、学校で、ことに小学校の低学年のうちに、席は率先して譲るものだと、しっかり教えておかなければなりません。

10 よい学校とは、心と体を鍛え、強くたくましい児童・生徒を育てる学校です。

母親の温かい胸に抱かれ、愛情を一手に受けることによって子どもの心は育っていきます。親の無条件の愛情、ことに乳幼児期の親と子の温かい心の触れあいが、人間の人格形成の原点です。しかし、いつまでも過保護では、子どもをスポイルしてしまいます。自立して人生を生き抜かなければならないのに、親の囲った温室の中でしか生きられないような軟弱な人生になってしまっただけでは困ります。

子どもは鍛えれば鍛えるほど強くなります。強くたくましい子どもを育てることは、いつの時代でも教育の大切な視点です。

11 よい学校とは、世のため、人のため、自分のためになる児童・生徒を育てる学校です。

自分さえ儲ければよいと、ルール違反を犯し、巨額の富を手にした人がいます。自分の会社が儲かるためならと、社員に不正なことをさせた社長がいます。自分さえよければという人が目立ちます。



「武士にとりて、卑劣なる行動、曲がりたる振る舞いほど忌むべきものはない（第3章）」「非礼は行はず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を思わず（第6章）」「武士の徳たる名誉心は、利益を得て汚名を被（き）るよりむしろ損失を選ぶ（第10章）」＝『武士道』新渡戸稲造

12 よい学校とは、特定の政治思想で日本を否定するような教育をしない学校です。

日本の多くの人は、教育は大変大事だと思っています。しかし、幸か不幸か日本の教育論は大きく二分されています。左派系教育学者（大学教授）の教育論と保守政党系の教育論です。左寄りと右よりの教育論です。思想信条の自由が認められている日本ですから、どちらよりでも各学者、各人の自由です。

左派系教育論者は、日教組の教育研究集会の講師を務め、戦後教育の一面をリードしてきたのではないかと思います。しかし、日教組が戦後一貫して意図してきたことは、

- ① 社会主義諸国を賛美し、日本罪悪主義の教育をしてきたこと
- ② 規律・管理面を軽視し、ゆとり・子どもと対等の教育、悪平等の教育を主張してきたこと
- ③ 教師を労働者と位置づけ、階級的労働観に基づく総抵抗、闘争主義に徹してきたこと
- ④ 教条主義を貫き、革命への路線を思考してきたこと

学校教育、ことに公立学校は多くの一般国民の素朴な願い、「基礎学力をしっかりと身に付けてほしい、善悪の判断をしっかりと教えてほしい」に応えなくてはいけないのです。学校で社会主義者の育成をしてもらいたいなどとは、現代の日本の多くの人は望んでいません。

13 よい学校とは、日本の伝統・文化を大切にし、かつ国際協調の精神を養う学校です。

悠久の昔から、日本は一度も途切れることなく、今日までずっと続いています。日本の各地で営まれている様々な生活は、その地に居住する人々の長い間のたゆみない努力によって築かれたもので、今日の我々の生活も祖先の遺産の上に成り立っています。

われわれ日本人は、まず「日本語・国語」を何よりも大切にしなければいけません。「日本語・国語」は日本が日本であることの証です。大相撲・歌舞伎・能・日本舞踊・民謡・茶道・華道・書道・俳句・和歌・陶芸・剣道・柔道・弓道・空手・和楽器・寺社建築等々も日本の大切な伝統・文化です。そして、正月の諸行事、3月のひな祭り、5月の鯉のぼり、七夕、盆踊り、中秋の名月、御神輿・山車でにぎわう秋祭り等、その土地特有の伝統行事があります。

しかし、最近、ジェンダー・フリーといい、男らしさ・女らしさを表すものを徹底的に悪いことだと決めつけて、ひな祭りや鯉のぼりのような伝統行事を否定する運動があります。

国際社会の中で活躍することは、日本の歴史をよく勉強し、日本について十分な知識を持っていることが第一の条件です。同時に、世界各国の歴史・文化を尊重することが国際理解の精神なのです。グローバル化とは、一つの価値への統一ですから、国際化とは違います。

14 よい学校とは、地域社会の人々とよく協力し、地域社会から信頼される学校です。

地域社会から信頼される学校が、一番よい学校です。それは「子どもが、学校に行っているから安心です」といわれる学校です。

信頼を構築するには、並々ならぬ努力が必要です。児童・生徒に、質の高い授業を、日々、保証し、基礎学力をしっかりと身につけさせなければなりません。規律や道徳をよく教え、規範意識を育て、社会に出てははずかしくない行動がとれるように育てなければなりません。



15 よい学校とは、現実を見つめ、かつ、夢や希望を育てる学校です。

「日本という国、本当に豊かさを感じます。百貨店には高級品が所狭しと並び、スーパーには溢れるほどの食料品、書店は崩れ落ちるほどの書籍、道路にはピカピカ光る自動車の列、見上げれば新しいビル群、地方も、よく舗装された道路が東西に延び、大きなりっぱに家が建っていて、海には豪華客船が浮かんでいる。日本ですごい夢の国ですね。」と、ネパールから来日した青年の話。

ところが、日本の青少年は、意識調査等で、この国に夢や希望を持ってないし、将来、特別偉い人になりたいとも思わない。という答えが多いそうです。

科学技術や知的な面での夢でなくとも、廻りにいる人たちのためになること、家族を日本一、否、世界一幸せにする、という夢だっさりっぱな夢です。現実をよく見つめると同時に、いろいろな夢や希望をはぐくむ、そんな学校が望まれています。

16 よい学校とは、自然体験を大切に作る学校です。

郊外の農地を借りて、体験農業をする学校が増えています。教室の理科の授業だけでは分からない、土のぬくもり、水の冷たさ、風の流れる音、太陽の光等を自分の肌に直接感じ取ります。虫の声、小鳥のさえずり、野の花の臭いなど、子ども達のよい教科書です。

また、農業体験学習は、「食」についても考えることができます。毎日、食事できることに感謝して「いただきます」「ごちそうさま」を素直にいえる子どもにしたいものです。

自然体験学習から、いろいろなことを考えさせ、学ばせることができたらよいのです。

17 よい学校とは、創意・工夫に満ちたカリキュラムを開発できる学校です。

学習指導要領の順守（コンプライアンス）は当然ですが、文部科学省は、学校の自由裁量を拡大しています。規制緩和で、独自の学校づくりに励んでほしいということです。

カリキュラム（curriculum）は、学校の教育内容や計画を組織的に展開したものです。学校の教育目標を達成するために、児童・生徒の発達段階、学習能力に応じて順序よく編成した教育内容のプログラムです。

児童・生徒に受けがよいやさしい、自由、興味・関心をもてるものを優先し、好きなものばかりを好きなだけ、自由に食べさせていたら、バランスを欠き、子どもはよく成長しません。学力は栄養同様、人格形成の基本的な要素です。

18 よい学校とは、悩んだり困ったりしている教師を支援する学校です。

人は、誰も、順風満帆の時ばかりではありません。失敗、逆風、失望、傷心など困ったことがいろいろ起こるものです。

学校全体の教育水準を向上させるためには、困り、悩める仲間教師を捨てるのではなく、温かくいつでも支援する体制が必要なのです。

19 よい学校とは、いろいろな考えの教師がいて、いざというときは一致団結して指導に当たる学校です。

カラタチの花が好きです。桜の花が好きです。
アヤメの花が好きです。ボタンの花が好きです。
リンドウの花が好きです……。花の好みは人それぞれです。花の好みなら争いにはなりません。しかし、政治思想や歴史・国家間の問題になると少しやっかいです。

教師も生身の人間。対立、争いのあることは仕方がありません。しかし、いざという時は、一致団結、協力し合って事に当たらなければ学校は機能停止、崩壊してしまいます。

思想・信条の違う教師と校長の話し合いを月に1度か2度、定期的にも実施することも、学校運営の一つのアイデアであると思います。



20 よい学校とは、一人一人の児童・生徒をよく生かす学校です。

学校には、いろいろさまざまな児童・生徒が学んでいます。勉強のよくできる子、勉強の理解の遅い子、運動の得意な子、運動の苦手な子、明るく笑顔の多い子、責任感の強い子、芸術面で優れた才能のある子、責任感の薄い子、裕福な家庭の子、生活に困窮する家庭の子、だが、一人一人かけがえのない存在です。

児童・生徒は、先生に理解されたら本当にうれしいといえます。多忙な毎日で、一人一人の児童・生徒との話し合いの時間を持つことなど至難の業かもしれません。しかし、そこを乗り越えて、たとえ、わずかな時間でもよいのです。話し合えばそれだけの効果が必ず現れると思います。

小学校では、昼休みにたまにでも児童と遊ぶのだって効果が表れてきます。

21 よい学校とは、「子どもが行きたい」という学校です。

子どもが行きたいという学校は、学校に行くといひとりでに笑みがこぼれてしまう学校です。尊敬できる先生がいて、好きな友達がいて、いじめがなく、よく分かる授業が毎日行われている学校です。そして、善悪の判断、良いところは褒めて、悪いことは厳しく叱ってくれる学校です。

学校は、いろいろな設備が十分揃っていることに越したことはないのですが、一番大切なのは先生、教師の存在なのです。どんなにりっぱな校舎、設備があっても、そこにいる教師がだめなら評価されません。知的で教え方の上手な先生、高い学問を身につけた教師、子どもの心に寄り添える人間的に魅力のある教師が多数いる学校なら、よい学校なのです。

何より肝心なのは、教師が本来の仕事（授業実践）に専念できる学校なのです。規律が乱れ、教育環境が混乱している学校では、教師の教育力は発揮できません。気弱なおとなしい教師は、荒れた教室に行くことさえできないのです。そんな教師に適切な指導や授業実践ができるはずはありません。

教育環境が整っていれば、専門知識は十分で、教材分析、教科のカリキュラム、授業への導入、学習への動機付けなどが的確であり、児童・生徒達を授業の中にみるみるうちに引き込んでいけると、面白い、よく分かる、もっと先に進みたい、自分でも深く調べてみたい、と授業が充実してくるのです。

22 よい学校とは、「いじめ等に真剣に向き合っている」学校です。

いじめられるのが嫌で学校に行きたくない、という児童・生徒がいます。いじめ問題は根が深いのです。人の集まる所、至る所にいじめは起こりうるものだと思うべきです。

各学校は、いじめ問題に対処するために生徒指導体制を強化していると思います。

学校は、願わくば厳格なおじさんと優しいおばさんに協力してもらったらよいと思います。日本には、団塊の世代の大量定年退職者がいます。学校に理解と関心を持ち、積極的に協力してくれる方々が数多くいると思います。



23 「三つ子の魂百まで」親は親らしく・愛情としつけが大切です

日本の学校が、みなよい学校といわれるようになれば日本の将来は大丈夫です。

しかし、実は学校に上がる前の父親、母親等の家庭でのしつけ、教育が子どもの人間形成の基をつくります。学校は、教科の学習、学力、知識・知力、集団生活等、家庭ではできない教育を担う教育機関ですが、学校に上がってよく伸びる子になるためには、人間の基本の所がしっかり形成されていないとだめです。大樹が強く頑丈なのは根幹がしっかりしているからなのです。

人間の根幹づくりは、まず母親の力です。子どもの教育に母親に優る人はいません。母親でないとできないのです。懐胎と同時に子どもは母親から影響を受けるからです。「乳を吸い、母親に抱きしめられ、愛情を一手に受けることによって子どもの心が育ち、母の心も育っていくのです。その温かい心のふれあいこそが人間の基本的人格の形成になくてはならないのです。」

子どもの基本的生活習慣は、「早起き」「顔洗い」「あいさつ」そして日々「温かい朝ごはん」をいただくことから身につきます。温かいごはんは、愛情の証です。

家で、勉強の習慣を身につけさせることは大事です。勉強の習慣づくりは読書から始めたらよいのです。読解力は全ての勉強のために必要な基礎学力です。

「三つ子の魂百まで」という格言は、日本だけでなくアジア、アメリカ、ヨーロッパ等、世界各国にもあります。どの国も幼児期を大切にしています。